

朝鮮に於けるロータリーと第10年次大会を回顧して

佐々木孝三郎

## 朝鮮に於けるロータリーとオ70年次大会を回顧して

佐々木孝三郎

オ70年次大会というのは当時日本全国をオ70区とした昭和13年5月15、16日に開催された京城大会を指すのである。翌14年別府に開催された年次大会がオ70区最後のものであるが意気揚らず、この年にオ70区(日本東部)、オ71区(日本西部)、オ72区(満鮮)と別れ、日満ロータリー联合会なるものが結成され、やがて15年の日本ロータリー解散にまで追い込まれたのであるから、見ように依っては京城大会は日本ロータリーの掉尾を飾る大会といっても差支えないのである。しかも前年の昭和12年には日本陸軍が遂に支那大陸に進攻して日本の生命を賭けることになり、世を挙げて軍国調となっていたのであるから、京城大会に朝鮮総督の南陸軍大将や小磯軍司令官が出て来て叱咤激励するという異状の大会であつても不思議ではないのである

---

ここで朝鮮に於けるロータリーの足取を一瞥して置きたいのであるが、京城を除いては詳しい記録が手許にないので、他は昭和14年9月現在で眺めるより外はないのである。

( 2 )

朝鮮の4クラブは昭和2年の京城、全10年の釜山、全12年の平壤、全13年の大邱と結成されたのであるが、いうまでもなく京城が中心である。昭和2年に17人のチャーターメンバーで出発したクラブが、今や98人の会員を擁する大クラブに発展したのだから、10年間に於ける京城そのものの発展も思い半ばに過ぎるものがあると言うべきであろう。今日京城の人口は凡そ70万、うち日本人15万というから正に大都会である。朝鮮側のクラブ会員も14、5名に達しているところを見れば先ず先ず順調な成長と思うのである。現に今次大会のホストクラブ会長は、朝鮮生命社長の韓相竜君であつたのである。また大会席上で表彰された和田八千穂(和田医院々長)君の如きチャーターメンバーとして入会以来、この十年間無欠席の榮譽を荷つた会員のあることを思えば立派な凡才であつたと言わねばなるまい。京城には朝鮮銀行、朝鮮拓殖銀行、東洋拓殖支店の如き国策会社があり、内地よりは三井物産、三菱商事等の如き或は第一銀行、三越等も早くより進出していたので、自ら育つべくして育つた大ロータリーであろう。京城大学の存在も亦たこの地を重からしめたものであろうか。

釜山クラブは朝鮮半島の玄関口として京城に遅るること八年にして、昭和10年に創立

されたことも当然であろう。チャーターメンバーは何人であったか判明しないが、今や33名の会員を有して居るクラブになつて居るのである。惜むらくは朝鮮側の会員/人も居ないことは一沫の寂寥を感ずるのである。しかしこれは一人釜山に限らず満州の各クラブにも言えることであり、吾々日本人の外地民族に対する認識の問題であろう。

平壤ロータリークラブ、昭和12年の創立であり、会員35人の中級クラブである。然しうち5人の半島人会員を擁するは意を強うするところである。李基燦君(地主)が会長であることも好感が持てる所である。

このクラブには後年大連凡Cの会員として親しまれた中谷芳邦君と、これまた相前後して奉天クラブの会員としてよく飲み、よく語つた新関八洲太郎君とがいた。中谷君は三菱系の日本穀産工業の専務であり、新関君は三井物産の出張所長である。新関君は奉天の支店長から哈爾濱の特別任務につき、終戦直後は最後の常務取締役として物産会社の葬式(解体)を出す大役に任じ、解体後は第一物産の創立に協力、その社長に挙げられ、これが成長を俟って今の三井物産設立に奔走、初代社長を経て現に会長の駈にあるが、遂にロータリーに関与する機を失つたことは吾々の極めて遺憾とする所である。

( 4 )

大邱ロータリークラブは頭記の通り昭和13年の創立で、戦前は活動の機会もなかったであろう。それでも最後は27名の会員を擁し、土地柄半島側の会員5人を有していたことは力強いところである。

×

×

×

さて京城大会である。参会クラブ数35、ロータリアン301名、家族148名計449名の参集で、ホストクラブの予想を遙かに上廻ったというから、当時としては正に大盛会というべきであろう。

この大会での特色はどことなく漲っている「非常時意識」と「聖戦」とロータリーとの融和を如何にすべきかという懸念が漸く人々の心にひそんでいるということであった。南大将が15日の夜1日に出て来て、5分間という予定を滔々35分間も「獅子吼」したり、其の晩の懇親会席上に現われた小磯軍司令官が「日本精神とロータリーの信条」なるものについての大雄弁も、心ある会員には却って複雑なる感傷を以って受取られたように思われるのである。

大会席上に於て里見ガバナーがロータリーの進路目標は従来通りで満足すべきか、何か

新らしい研究か、希望はないかと発言すれば、京城クラブの丹羽清次郎君から従来のロータリーの原則であった奉仕と親善は、漠然としていて非常時にはピッタリしない。吾々の毎日の功作を以て国に報いる意味に於て、ロータリーの原則を「生業報国」ということにしては如何という発言があった如きは、今大会の一部底流にある「民族的」「聖戦」意識が氷山の一角として現われたように感じとつた人達もあつたのである。

5月14日の朝鮮ホテルに於ける前夜研究懇談会も盛大なものであつた。出席者218名であつたがその出席者中一部を拾えばこんなものである。

東京 会長 赤星陸治 幹事 小林雅一 (敬称略)

大阪 会長 前田 忠 幹事 露口四郎

神戸 会長 黒瀬弘志 副会長 小菅金造

札幌 会長 笠原十司 幹事 宮脇 富

高知 会長 入交太蔵 幹事 飯 義寿、阿部秀太郎

京都 大沢徳太郎

福岡 副会長 山口修一、中牟田喜兵衛、麻生太賀吉、松田昇平

仙台 副会長 金森太郎

郡山 会長 橋本萬右衛門

小樽 幹事 山本信夫、青木一雄、久野岩治

奉天 会長 日塔治郎 幹事 伊藤多度作、佐々木孝三郎

ハルピソ 幹事 軍司義男

こゝで注目すべきは皇紀2601年の世界大会東京招致の件であった。

小樽の山本信夫君の発言。紀元2601年の世界大会を東京で開催するという希望は昨年の北海道大会に提案されて、既に皆さんの御賛成を得ているのでありますが、今回帯広の小松君から北海道クラブの希望として再び御提案があるので、茲に更めて御賛成を得て置きたいと思うのであります。

これに対して東京の小林雅一君から次のような回答があった。即ち東京では招致委員として赤星会長を含めて15名、そのうち更に小委員所謂実行委員5名を挙げて着々準備を進めているが、之を決める権能はこの6月サンフランシスコ大会の理事会にあるので、その前には餘り騒がぬようにとシカゴ本部から注意があったので決まるまでは騒がぬつもり

ではあるが、6月の大会には北島さん御夫妻と御令嬢とが出席されるので正式の招待状を託してあるのみならず、永く日本に居らるゝ米国人のフレザー氏に同行して頂くことになっている。其上また国際観光局長の田誠氏にもお願いして一行に同行して頂くことにしてあり、幸いにして決定したならば大いに宣伝する手筈も十分とりのつてあるから、其節はよろしくというのであった。

なお、こゝで里見がバナーより「ロータリー運動への関心」に就いて下の如き談話があった。即ち最近国際ロータリー本部からガバナーやパストガバナー其他に対して書面を以て「将来のロータリー運動」というものはどういう風になつて行くのが宜しいであろうか、従来のままのロータリーの行き方、この姿のまま伝統的に推し進んで行つてよいものかどうか、こういうことに就いて意見が徴された手紙が行つていようであります。先般私が満州の各クラブを廻つた時、大連にチエッコのロータリーのがバナーをやつたという人がいて話して居られた。その人もこれについて色々の考えを持っているとのことであつた。餘り時間がないので詳しい話は聞かれなかつたが、吾々としても充分考えて置かねばならぬことゝ思うので、御意見のある方々はこの際御遠慮のないお話をして頂きたい、という

ことであつた。国際的にも異状な空気が流れ出している際であるから、本部としても思い悩んでいることゝ思われるのである。

5月15日京城府民会館に於ける大会は、前記の通り極めて嚴肅の裡にも盛大を極めたものである。

里見ガバナーより南總督以下、大野政務總監、甘蕨京畿道知事、佐伯京城府尹等々來賓の紹介があり、ホストクラブ会長の歓迎の辞、京城府尹の祝辞を経て南總督の大演説があつたことは上記の通りであるが、里見ガバナー挨拶の中に次の如き一句があつたことは記憶に残るのである。即ち私は就任の当時に於きましては、かゝる重大なる事變に遭遇するということは夢にも考えて居りませんでした。かゝる重大な時局下に於けるガバナーとしてこの役目をつとめるのであつたならば、当然その任に当るのではなかつたのであります。顧みて自分の微力なることを深く自覚致しましたが、就任を致しました後のことでありましたから、只管に過誤のなからんことを期して今日に至つたのであります。及ばないことが多いのであります。この機会にこの点はおわびを申し上げたいと思つたのであります。わがプロ区ロータリーはこの時局に遭遇致しまして、ロータリーというものを考え直す機会を

与えられたように思うのであります。ロータリーに対する様々の批判は極めて意義深き刺戟であり、反省の機会を与えられた如くに感ずるのであります。この点に於て平和の時代に経験することのないことを吾々は経験し得たのでありまして、将来国際ロータリーの動きの上に我がア〇区ロータリーは、この点に於て特色を持った極めて真摯なるロータリーの活動振りを示すクラブになって欲しいものであることを痛切に感ずる次第であります。温好誠実な里見さんが如何に心痛されたかが容易に窺知し得るのであった。

国際ロータリー会長のモーリス・ヂュペリー（巴里）の代理として直前ガバナー朝吹常吉君の挨拶があり、又次期ガバナーには松本健次郎君が選ばれたのであった。松本さん御夫妻も親しく本大会に御出席の予定であつたそうだが、何か御家庭に御不幸があつたとかで御欠席、

源一郎  
の死。

午後四時に南総督夫妻は総督府裏の慶会楼にロータリーアソシエートを招待してお茶の会が催され、続いて5時45分からは府民会館に於ける懇親晚餐会が催されたのであった。ここで小磯軍司令官の講演があつたことは前記の通りである。

大会才2日の16日は市内見学やゴルフの日であつたので特に誌すことはないが、この

大会を非常に楽しくリラックスにしたのは、大会幹事の岩佐重一君であつた。奉天の佐々木はこの大会の様を兩三度に亘つて奉天の週報に書き送っているが、其の中にこの大会は南大将と岩佐幹事の大会であつたと書いているが正にその通り、岩佐君という人は京城高商の校長先生であるが、其の司会振りは誠に輕妙洒脱而も明朗快適で、末会者一同は啞然たるものがあつたのである。里見さんは岩佐さんをかバナー事務所の名譽囑託として、今後大会毎に司会の指導役にすると笑わしたことがあるほどである。

なお、この年の出席率の最優秀クラブは小樽RCで、優勝旗受領があるので該クラブからは家族とも14名の出席者があつたのである。

以上が大会の様であるが、才2日の夕刻からは金剛山へのエクスカージョンである。凡そ3組に分けたのである。才1組は内金剛組、才2組は外金剛探勝、才3組内外金剛探勝組であるが、之を更にA.Bの2班に分け、A班は専ら老人向で、B班は健脚組ということであつた。佐々木はこのB班に申込みと端なくも小樽組と一緒にになり、実に愉快的、而も大いに難渋した三泊四日の大登山であつた。終生の思い出となつた。帰途小樽班の人達に帰路は是非奉天に立ち寄ること、最も美味な支那料理を御馳走すべしと豪語して訣れたの

のであったが、数日後に果して青木、久野、小滝の3君奉天に現われ、約束の支那料理で款を尽したことは今もなお思い出の種となっている次第である。